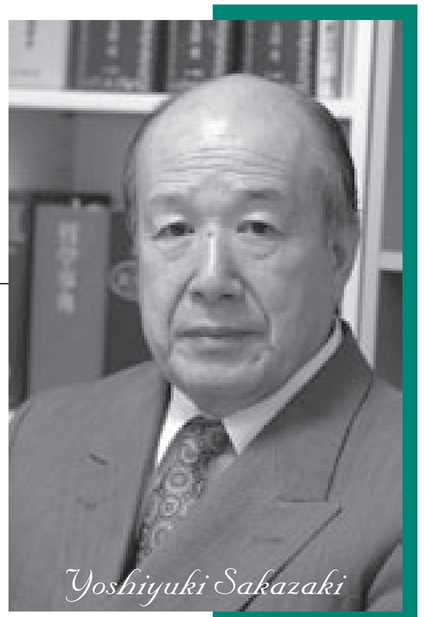
宇城市のみなさん こんにちは

各界で活躍中の宇城市出身の方から、
ふるさとへのメッセージをいただきました。
第１回目は松橋町出身の坂崎善之さんです。



【プロフィール】1936年、長春で生まれ、松橋町で育つ。新聞記者を経て本田技研に入社、販売促進、宣伝企画・制作に従事。以後フリーライターとなり、70年に編集プロダクション設立。本田宗一郎氏の著書の出版に協力。82年から3年間、本田氏が第二次臨調（臨時行政調査会）の土光敏夫会長の要請を受けて井深大ソニー名誉会長（当時）とともに代表世話人となって創設した「行革推進全国フォーラム」の事務局長を委嘱された。

東京ミッドタウンを見上げながら

坂崎　善之

古稀を迎えてようやく「歩き方」の稽古を始めています。

私は、昭和19年、小学2年の夏に中国（長春）から帰国し、現在の松橋地区大野から当尾小学校へ通学するようになりました。藁草履をはき、雨の日は裸足で片道3キロほど離れた山の学校へ通ったのですが、放課後はさらに山奥の友達の家へ遊びに行き土手から土手を飛び降りて走るような道草ばかりくっていたものです。

あれは4年生の夏、下校の途中大きな溜池で水遊びを始め、みんなで漕ぎ出した廃船が深間にきて沈没、泳ぎの不得手だった私と谷崎君という同級生が溺れかけました。わずかに水面に顔が出ると谷崎君はけなげにも「おれにつかまれ！」と言ってくれるのですが、互いに浮きつ沈みつしているわけで、つかまったらもっと事態は悪くなるのです。薄濁りした水を飲みながら自分はこうして死ぬのだと思いました。恐怖感はなく、意識の隅で「たんざきは偉いな」と感激したことを覚えています。そして、もうだめだというところへ、大きな杉の丸太に乗った何人かの友達が両手で水を掻きわけながら妙にしずしずと近寄ってきてくれました。

そのような子供時代の道草のおかげで私は丈夫なおじいさんになりました。歩く練習というのは、背筋を伸ばし、腰を押し出すようにして歩く、ヒトの直立二足歩行としてはごく尋常なものなのです。父と歩くたびに「背を伸ばせ、しゃんとしろ」と叱られていましたが思春期以後の私は背をかがめ首を前に突き出すような「しこった」歩きかたをしてきたのでした。

「しこる」といえば、出雲の大国主命に葦原醜男の別称があるように、大和言葉では醜という言葉に強いとか強がるという意味をも持たせてきました。「しこる」はそこからきて熊本地方に残った言葉だと思います。歌舞伎の語源とされる「傾く＝かぶく」に通じる気障な振舞いのニュアンスもあり、半世紀前の高校などでは「しこっとる」と認められた生徒は必ずといってよいほど上級生から「打たれ」ました。

私はいま、用事にかこつけて近所にできた東京ミッドタウンに足を運びます。新しい複合施設は何もかもぜいたくで公園の緑も悪くありません。しかし、その魅力も子供たちをたくましく鍛え育てたふるさとの野山の風や、不知火海を抱いて長く続く海岸線の輝き…などには及ばない気がします。散歩の途次、ふと郷里の人々の暮らしを包んでいるさまざまな「なにか」を思うと、私の胸中には絵の具を溶かしたようなまだら模様の羨望と郷愁とがきざし、肝心の歩行姿勢がくずれそうになったりするのです。

（著述業・編集プロダクション経営　東京・港区在住）

☆宇城市立図書館には下記の蔵書があります。ご覧になってみてはいかがですか？
「ホンダの遺伝子―受け継がれる創業者・本田宗一郎の精神」…松橋
「本田宗一郎潰れてたまるか！逆境こそ、創造へのスタート！」…三角・松橋
「人生はアマ・カラ・ピン本田宗一郎遺談」…不知火・松橋
「人生の達人・本田宗一郎」…松橋

市職員！「ただ今、奮闘中」

現在、宇城市役所には636人の職員が市民の生活向上のため、業務に励んでおります。その中で、業務以外でもボランティア活動などで、市民の皆さんと交流を深め、より一層地域に溶け込もうと努力している職員をご紹介します。

8年ぶりに大太鼓に挑戦。そして入賞。

プロフィール

田口　明典
1968年（昭和43年）生
1989年（平成元年）
　不知火町役場採用
2007年（平成19年）7月現在
　不知火支所総合窓口課勤務

「和太鼓」を叩き続けて・・・

21歳でバチを握り、早いもので17年が過ぎようとしています。「不知火竜燈太鼓保存会」を通じて、本当にいろいろな経験をさせていただき感謝しております。入会当時は、本番の後の打ち上げが楽しみで出演し、そんな中で、社会勉強をさせていただいていたように思えます。また、様々なイベントにも積極的に参加させていただきました。ミニバレーや綱引き、駅伝大会、不知火海伝馬舟競漕大会、最近ではキンボール大会など、地域の方々とスポーツを通じて交流させていただきました。

現在は、当時とは立場も異なり、太鼓を叩くことの楽しみに加え、保存していくこと、子どもたちの育成などと言った使命感を持ち取り組んでいます。

過去を振り返り、出演したたくさんの舞台を思い出すと、全てを語り尽すことはできませんが、名誉なこととして「くまもとお城まつり」の大太鼓コンテストで初代チャンピオンになった事は一生忘れることのできない思い出となっています。その時、表彰式が終わった後、舞台裏で60代と思われるおじいさんから、「あたが一番良かった」と言ってもらえたことが、一番うれしく、今まで叩き続けてきたことの励みになっています。また、くまもと未来国体では、アクアドームのプールサイドでオープニングの大太鼓を叩けたことも名誉でありました。

毎週木・土・日曜日、子ども太鼓教室の風景

本当に太鼓を通じて、様々な経験・体験をさせていただいています。

人は初めてのことに挑戦するときには勇気が必要です。しかし、何事もやってみないと分かりません。一度っきりの人生だから、何にでも挑戦し続けたいと思います。続けることにも忍耐力と精神力が必要ですし、何よりも他の人の支えがあるからこそできるのであることを忘れてはいけないと思います。

日ごろから温かく見守っていただいている人たちに、心から感謝申し上げます。

最後に、太鼓はただ叩くだけで音を奏でてくれますが、最近はその音を大切にし、ひたむきに心を込めて、精一杯、全力で、楽しく、心弾むように、叩くことを心掛けています。これからも地域に根付き、人の心に伝える太鼓を目指し、子どもたちと一緒に叩き続けていきたいと思っています。

イベントでのステージ